

R7 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	小林 聡	研究活動・教育活動・大学運営・社会貢献のすべての分野に渡り、計画を実行できるよう努力したと自負している。及第点には達していると思う。研究活動を効果的に進めてゆくため、タイム・マネージメントの能力も身につけたい。
作曲	教授	山本 裕之	研究に当たる作品発表は、今年度は例年にない量の音譜が書けたことで概ね満足している。ところで音楽学部はスタッフが少ないため、多くの横断的な仕事を各自が大量に抱えなければならず、その作業量は近年とみに増えてきた。予算が逼迫していることがその原因の中心になっており、やりくりや工夫も限界に近づいてきていると感じる。教育・研究・大学運営という業務の柱のバランスが崩れている現状を、経営がきちんと把握する必要があると考える。一方、施設の老朽化による業務への支障が今年度は目立った。インフラ整備のための予算がないのは全国的な課題ではあるが、停電により一週間授業が飛ぶという前代未聞の事故はさすがに対応が難しい。
作曲	教授	成本 理香	学部長を拝命して2年目。慣れるどころか、さまざまなアクシデントに見舞われそれらに振り回された1年となってしまった。これらのアクシデントから、大学の現状に問題点を感じたため、将来のためにそれらの整備が必要であると考えている。大変な1年となったが、音楽学部の全同僚教員からの温かい励ましと実際のサポート、職員からの助力などで乗り越えることができた。この点、心からの感謝を伝えたい。 作曲も計画通りに行えてはいるが、学部長として大学運営業務に裂かれる時間が多すぎて、ペースが少し落ちている。そのような中でも、研究対象としている作曲家兼田敏に関する調査において、これまで存在が知られていなかった作品の発見や詳細不明だった作品の詳細が判明し、計画以上の成果をあげられた。
作曲	准教授	安野 太郎	令和7年度は、委嘱作曲と自動演奏楽器研究、名古屋工業大学との共同研究を並行して進め、制作・研究・発表を相互に接続させる一年となった。教育面では、共同研究プロジェクトを学生と実施し、制作と検証を往復する学習機会を設計したほか、必修「ソルフェージュ」の運営と改善に取り組んだ。また、入試副委員長・広報委員長として、入試運営の確実な実施と、受験生に向けた情報発信の整備を進めた。今後は、研究成果（論文等）の公表を確実にし、教育活動へ還元していく。
音楽学	教授	安原 雅之	バランスを保ちながら研究、教育、大学運営、社会貢献を推進することを心がけた。
音楽学	教授	東谷 護	今年度は当初の計画では研究、教育、大学運営、社会貢献、それぞれにかかる時間をバランスよく配分したが、結果的に大学運営にかなりの時間を割かれてしまった。とりわけ、博士後期課程委員長業務の範疇を遙かに超える業務にも、大学運営を円滑に進める上で協力すべきと考え、時には出張先でも業務を遂行した。これに加えて人事委員、教務委員をつとめた。 このようななかで、教育にかかる時間を削ることはしなかったが、研究に割くべき時間を削らざるを得なかった。そのなかで、科研費プロジェクトの一次資料の基礎整備を中心に地道に研究を進めることが出来た。大学運営では博士後期課程のカリキュラム改編に中心的に動き、2026年度実施に漕ぎ着けることが出来たことは特筆に値する。総じて、今年度は例年以上に「よくやった」と評価したい。
音楽学	講師	七條めぐみ	研究活動においては、論文1本が学術雑誌に掲載された。また、社会貢献活動として関わっていた「病院アウトリーチプロジェクト」において、愛知県立大学との共同研究に着手した。教育活動では、卒論3本、修論1本、修了論文15本（うち12本が完成）の指導に携わる中で、前年度に引き続き個別指導を重視した論文執筆支援を行った。大学運営では、音楽カリキュラム委員長として、R8年度の音楽学部カリキュラム改正に向けた準備を進めるとともに、全学的な教養カリキュラムの改革にともなう調整・意見集約を行った。
声楽	教授	森川 栄子	研究活動においては、大学の用務が多忙すぎることで、共同研究者の家庭の事情もあり、予定していた研究が進められなかったことが残念である。それ以外については概ね予定通りもしくはそれ以上の成果を挙げることができた。
声楽	教授	小原 啓楼	今年度の研究活動では、兵庫芸文定期公演『戦争レクイエム』や、東京シティ・フィル定期公演（ドン・カルロ）表題役等、要求の高い公演が続き充実したものとなった。また、気鋭の指揮者、沖澤のどか氏との京響第九公演では、数多く演奏してきたベートーヴェン第九交響曲にも関わらず、新鮮な演奏体験を得ることが出来た。得られた知見を咀嚼、コーチングにて提供することにも手応えを感じている。学生の漠然としたニーズをいかに高次のベネフィットへ導くことができるか、それぞれの特性に合わせた示唆を更に目指したいと考えている。

R7 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
声楽	教授	初鹿野 剛	大学オペラ運営については、長久手市文化の家の工事による代替会場開催や実際の事務を担当する部署の体制の問題ほか様々な要因により、これまでより多くの業務を担ったが、各関連業者や芸術情報広報課職員、同僚らと連携し、多くのお客様にお越しいただき、お楽しみいただくことが出来た。《ドン・ジョヴァンニ》自体、聴けばかりで歌うことに関わることはなかったが、今回初めて副指揮として関わり、楽曲研究出来たのも意義深い。 また、研究活動としては、五芸祭を通じ、ホスト校・沖縄県立芸術大学の教員らと連携してブラームスの重唱曲を研究、五芸祭内で発表することが出来た。学生企画の多い中、教員の研究発表を行い、好評を頂いた。 専攻内においても、学部内で大所帯となる声楽専攻の教務を預かり、各授業運営のサポート、実技試験運営を迅速かつ適切にすることが出来た。また本学でのこれまでの経験を活かし、主任や広報、入試等の同僚の業務をサポートした。
声楽	准教授	川島 幸子	今年度は、愛知県立芸術大学の教員になって11年目の年ということもあり、元門下生の卒業生たちも増えてきたことから、第1回川島幸子門下生のよる演奏会を学外のホールで開催した。現在の門下生13名の他に、元門下生の卒業生2名も参加し、普段の実技試験とは違う曲で、演奏時間も一人15～20分と長く、またホール予約からプログラム作成・チラシ作り・裏方・集客など全て学生たちで自主的にを行い、大変有意義な演奏会を開催する事ができた。今後も2年に1度定期的に開催していく予定である。
声楽	准教授	森 寿美	各項目で目標として掲げた内容を大幅に達成することができた。特に力を入れて取り組んでいる地域社会とのつながりがある活動やケアアート活動など活動の幅を広げたことも大きな成果である。毎年、所属学生数多い中で大学運営の負担が大きくなってきておりバランスをとりながら研究・教育の質を保ちながら活動することが年々難しいが引き続き努力していきたい。
声楽	准教授	相田 麻純	初年度ということもあり、様々なことに刺激を貰う1年だった。その中で、自身が目指していた「教員」という立場が、本学の学生、そして社会においてどのような期待をされているのかについて考え、歩むことができたと感じている。
ピアノ	教授	掛谷 勇三	施設整備員会副委員長、入試委員、人事委員会副委員長等の大学運営業務および教育活動と並行して研究活動を継続し、広上淳一氏指揮アルモニア管弦楽団との共演でセルゲイ・ラフマニノフ作曲ピアノ協奏曲第3番二短調作品30を演奏、金管楽器とのアンサンブルコンサートに出演した。研究活動の時間の捻出に苦労しながらも、協奏曲演奏会の準備ではオーケストラの練習に早い段階から参加することで入念にオーケストラパートを研究できた。金管楽器とのアンサンブルでは、ピアノ独奏作品では触れることのなかった作曲家による多様な作風の作品研究を行なった。
ピアノ	教授	内本 久美	学生への指導、大学運営に関する業務の遂行に加え、継続的な研究を行い、海外での研究発表を複数回行った。
ピアノ	教授	鈴木 謙一郎	学生委員長、芸術教育・学生支援センター副委員長として会議の進行を円滑に行った。
ピアノ	教授	中尾 純	大学運営の激務の中、シューベルトの崇高な音楽を多くのお客様にお聴きいただくことができた。春にはハンブルク音大を訪問、マスタークラスを行った他、今後の国際交流について学長はじめ多くの関係者と協議を進めることができた。
ピアノ	准教授	武内 俊之	自分自身の感性や自然にあるべき状態、また音楽や芸術に求める要素など、さまざまな部分が徐々に変化しつつあり、それらを自問自答し続ける年であった。引き続き次年度に向けても、模索していかなければならないと感じている。
ピアノ	准教授	秋場 敬浩	研究活動においては、長年にわたるライフワークであるチャイコフスキーのピアノ連作『四季』の新たな校訂版楽譜（音楽之友社）を、我が恩師でありロシア・ピアノ界を代表する巨匠の一人であるヴィクトル・ブーニン氏との共同編纂のもと出版することができたことが大きな成果となった。 教育活動においては、第3回JPTA新人ピアノコンクール第3位、第21回東海音楽フェスティバルピアノF部門（大学生）銀賞等の受賞者輩出したほか、学内外における学生の音楽活動のサポートを昨年度以上に行うことができたと思う

R7 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
弦楽器	教授	福本 泰之	今年もコンサートの数はピーク時に比べれば半数ほどにとどまった。それでも昨年度から始めた「室内楽の響演Ⅱ」のシリーズほか充実した一年が送れた。一方運営面では、社会連携センター長として更に努力をしなければならない思いながらも、予算不足、マンパワー不足に悩む1年となった。来年度の60周年事業の開催のために奔走した年でもあった。
弦楽器	教授	白石 禮子	研究活動として演奏会を予定通り行い、非常に好評であった。教育活動では、複数の学生が様々なコンクールで入賞・受賞、学内では卒業演奏会出演や「室内楽の夕べ」「室内楽の楽しみ」「エマージングコンサート」などに出演、本学大学院に優秀な成績で進学するなど、多くの成果を挙げた。向上心の強い学生ほど周到な準備を行い質問も多いが、学生個人に合わせた解決策を見出すことは勿論、「プロ」としての考え方にまで意識を繋げる指導を心掛けている。社会貢献では、マスタークラスやコンクール審査を行ったが、特にマスタークラスでは海外からの受講者に対して英語でレッスンをを行い、大きな手応えを感じた。
弦楽器	教授	桐山 建志	長い目で見て受験生獲得に繋がるかもしれない活動が、少しは出来たと思う。研究活動では、引き続き知られざる名曲の発掘に努め、成果をあげることができた。
弦楽器	准教授	渡邊 玲雄	今年度は、仕事の柱となるべきものが複数存在し、それぞれの柱を大事にしながらも、多くのプロジェクトなどに挑戦する一年となった。これだけ多くの柱を抱えるのは、今年度が初めてだったので、難しい部分も垣間見えたのは確かで、体調面も含め、来年度はもう少し自分の時間を大事にしなが、それぞれの分野にどう注力していくべきか、バランスを考えながら取り組んでいくようにしたい。一番大事にしたいのは、学生との研究の時間で、弦楽器コース、コントラバス研究室、が、より高く広い視野を見ながら取り組める研究を進めていけるようにしたい。来年度はもっと積極的に海外の大学との連携も進められるよう、努力したい。
弦楽器	准教授	西谷 牧人	常勤の教員として2年目を迎え、愛知県内での演奏や学生たちとの共演の機会も増え、とりわけ12月19日の弦楽合奏定期演奏会でチェロ協奏曲を学生たちと共演したことは素晴らしい機会となった。音楽を通して社会貢献が出来るという事実を学生のうちに少しでも味わってもらいたいし、そういった経験の意義深さを改めて知る機会となった。
管打楽器	教授	倉田 寛	令和7年度は、演奏活動を研究活動の中核として位置づけ、国内主要オーケストラへの客演や室内楽活動を通じて、トロンボーン奏法や音色形成、アンサンブル機能に関する実践的研究を行った。京都市交響楽団や東京藝術大学アカンサスオーケストラへの出演のほか、本学教員との金管五重奏リサイタル、逗子市で開催される「なぎさプラスリステン」演奏会など継続的な演奏活動を通じ、演奏実践と研究の両面から成果を積み重ねた。教育活動としては、北海道紋別市のオホーツク紋別音楽セミナーにおいて専門的指導を行うとともに、台湾教育大学にてコンサートを実施し、日本の金管教育・演奏文化の発信に努めた。また、浜松学芸高等学校芸術科音楽コースや岡崎市光ヶ丘女子高等学校吹奏楽部の指導、浜松交響楽団および陸上自衛隊第10師団音楽隊への指導を通じ、基礎奏法や合奏技術の向上に寄与した。大学運営においては、一般入試、推薦入試、大学院入試に関わり、管打楽器コースの入試委員として試験運営や実技審査に携わったほか、学生委員会では奨学金関連業務の取りまとめを行い、学生支援体制の充実に努めた。さらに、名古屋工業大学との連携による共創講座の開催や、愛知県を中心とした吹奏楽・アンサンブルコンクールの審査、地域指導などを通じて、音楽文化の普及と地域社会との連携を推進し、専門的知見の社会還元に取り組んだ。
管打楽器	教授	深町 浩司	研究者と演奏家という両輪のバランスを取りながら一定の成果を出せたことは高く評価できる。また研究成果をメソッド化して打楽器専門教育に役立てたことは、一定の評価ができると考えている。
管打楽器	教授	橋本 岳人	研究活動では日本センチュリー響、名古屋フィル他国内のオーケストラで首席客演を務めた他、室内楽、ソロ活動とバランス良く行うことが出来た。教育活動では多くの試演会を開催したことで学生が切磋琢磨し、国内最難関のフルートコンクールに於いて上位入賞者を輩出。学内試験でも最良の結果を残すことが出来た。また日本音楽コンクール他多くのフルートコンクール、吹奏楽コンクールの審査員を務める他、国内の音楽高校に於いて公開講座を行い後進の指導を行う等、国内の音楽界に貢献した。

R7 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
管打楽器	准教授	ブルックス 信雄 トーン	公開講座やアウトリーチ活動、地域との連携事業を通じて、音楽芸術の魅力と大学の専門性を社会に発信することができた。地域文化の発展や次世代育成において、一定の役割を果たすことができたと考えている
管打楽器	准教授	井上 圭	研究、教育、運営、社会貢献全てにおいて、一定の成果をあげることが出来たので、次年度も引き続きバランス良く取り組んでいく。 今後さらに少子化が進む中で、芸術を学びたいと希望する人材が増えていくようにする為にも、魅力ある発信を増やしていく。
教養	教授	井上 彩	令和7年度は音楽学部人事委員会委員長を担当し、また教養教育等教員会議の議長を務めた。健全な大学運営の一助となるよう努力した。教育に関しては英語科目では例年新たな教材を導入し、学生の需要や習熟度の変化に沿うよう心がけている。研究面では新たな研究課題に科研費による助成を受けることが決まった。助成期間1年目としてはまとまった研究成果を出すことができ、国際学会と国内学会地区例会で発表した。学期中は教育活動と大学運営とで手一杯になってしまう傾向にあるので、論文執筆のための時間を確保することが次年度の課題である。
教養	教授	大塚 直	令和7年度は芸術情報センター長を務め、教育研究審議会を中心とする様々な会議に出席、報告を行うなど大学運営に携わった。ドイツ語教員としては日本独文学会東海支部の支部選出理事を務めた。研究者としては本学で他専攻の教員と共に芸術講座を開催した。また戯曲とナラトロジーに関する論考を準備中である。
教養	准教授	三品 陽平	「研究活動」については、日本教師教育学会の課題「教師教育学の学術的基盤の検討」に発表・論文を通して目標を達成することができた。「教育活動」については生成AIを使った授業や、新たな学生の就職支援によって、学生の学びや進路に貢献することができた。「大学運営」については、教職課程運営の安定に努められた。「社会貢献」については、理科教育の推進と教師の支援をすることができた。
教養	准教授	菅野 類	本学に着任しての初年度はあつという間の一年でした。特に意識したのは教育活動で、芸術大学という環境へアジャストできるように手探りながらベストを尽くしたつもりです。大学運営・社会貢献に関しては学びの時期と位置づけ、与えられた環境の中でどのような貢献ができるのかを意識しながら各種委員会やイベントに参加してきました。来年度以降、私の専門であるイタリア文化と文学というコンテンツを、関係部署と連携しながら発信していきたいと考えています。
教養	准教授	石田 智敬	科研費・受託研究を基盤に、教育評価論・カリキュラム論の研究を理論・実践両面で着実に推進した。あわせて、担当科目では学生の特性を踏まえた授業設計・実践を継続し、学術と学校現場をつなぐ学習環境の充実を図った。さらに、委員会活動による大学運営への参画と、学外委員・学校連携を通じた社会貢献にも継続的に取り組み、教育・研究環境および教育実践の向上に一定の成果を得た。